〈史料紹介〉

東京府文書「府治類纂　地輿」（その三）

横　山　百合子

史料紹介「東京府文書「府治類纂　地輿」」（その二）（『千葉経済大学論叢』四〇号所収）に続き、本号では、「府治類纂　地輿　第十七冊」（東京都公文書館所蔵　東京府文書、請求番号634.A4.17）のうち、目次番号二十六～三十七の記事を紹介する。凡例は、（その一）を参照されたい。

『二十六』

『己巳五月廿八日廻し済』

書面地代之内、差向俊之助は金千両、市右衛門は千四百五拾五両弐分銀八匁弐分三厘五毛為相納、其余は今般町屋敷拝借被仰付候ニ付、地税之内を以返納可致旨可申渡候哉、此段相伺申候

巳五月廿八日

奉歎願候書付

樽　俊　之　助

私儀、元町年寄勤役中取扱候所々上納地地税金取立置候分、上納可仕旨被仰渡候処、右税之儀、去卯年分金千四拾五両弐分銀七分二り一毛、当辰正月より八月分迄金六百九拾六両壱分銀七匁六分弐厘六毛五忽、都合金千七百四拾

壱両三分銀八匁三分四り七毛五忽上納可仕処、去卯年分之地税金勘定合入狂ひ、混雑仕不足相立、金高纏り兼候ニ付、種々調達方日夜心痛罷在候得共、何分難行届追々延引相成、甚当惑難渋仕候間、重々奉恐入候得共、右金高之内、金千両は御差図次第相納、残金七百四拾壱両余之儀は、来巳正月より月々下賜候月給之内を以、月々金拾両ツヽ上納可仕候間、何卒出格之御垂憐を以、前書之趣御聞済被成下候様仕度、依之別紙勘定書相添、此段奉願候、以上

辰十二月

樽　俊　之　助

上納地々代金上納方之儀奉願上候書付

舘　市右衛門

元私取扱候上納地其外所々地代金取立有之候分、上納可致旨被仰渡奉承知候、右取立置候地代金之儀は、去卯正月より当辰八月分迄ニ御座候、然ル処、去卯年分地代金之内不能并勘定合入狂ひ混雑有之、差向一時上納差支候間、当辰正月ゟ八月迄取立置候地代之分相納、去卯壱ヶ年分之儀ハ当分御猶予被成下候様仕度、依之地代金内訳書相添、此段奉歎願候、以上

辰十二月

舘　市右衛門

上納地其外地代取立高

一、　金三千六百九拾六両弐分
　　銀八匁弐分三厘五毛

去卯正月より当辰八月迄壱ヶ年八ヶ月分

内

金弐千弐百四拾壱両余　　去卯年分

金千四百五拾五両弐分　　当辰正月より八月分迄

銀八匁弐分三厘五毛

右之通御座候、尤去卯年分、箇所訳巨細之儀取調出来次第差上候様可仕候間、差向当辰正月より八月分迄取立候地代ヶ所書相添、此段奉願候、以上

辰十二月　　舘　市右衛門

御請書之事

一、本革屋町家持俊之助外壱人奉申上候、私共元町年寄勤役中取扱仕候地代金之内、俊之助儀は金千両、市右衛門儀は金千四百五拾五両弐分銀八匁二分三り五毛上納可仕、且未納之儀は拝借地地代ヲ以上納可仕旨被仰渡、奉承知畏候、右上納金之儀ハ、来ル二日無相違相達上納可仕候、依之御受書差上申所、仍如件

明治二巳年五月廿九日　　本革屋町　家持　俊之助印

本町壱町目　同　市右衛門印

東京府宛

『己巳六月三日廻シ済』

書面之残金、当五月分より月々金八両壱分銀五匁ツ、上納致候様可申渡候哉

六月三日

午恐以書付奉願上候

一、本町壱町目家持市右衛門奉申上候、私元町年寄勤役中取扱候所々地代金、去々卯年并去辰正月分より八月分迄取立候分未納ニ御座候処、願之上、去辰八ヶ月分金千四百五拾五両弐分銀八匁弐分三厘五毛上納、残金之儀ハ、拝借地々代之内ヲ以上納可仕旨被仰渡、冥加至極難有仕合奉存候、則去辰八ヶ月分金千四百五拾五両弐分銀八匁弐分三厘五毛上納仕候、残金去々卯年分金二千二百四拾壱両銀七匁八分弐厘五毛之儀は、壱ヶ年金百両上納之割合ヲ以、当五月分ゟ金八両壱分銀五匁ツ、月々上納仕度奉存候間、何卒格別之以御憐愍、願之通御聞済被成下置候様、偏ニ奉願上候、以上

明治二巳年六月二日　　本町壱町目

家　持　　市右衛門印

東京府宛

書面之残金、当五月分ゟ月々金五両ツ、上納致候様可申渡候哉

六月三日

午恐以書付奉願上候

一、本革屋町家持俊之助奉申上候、私元町取扱候所々地代金千七百四拾壱両三分銀八匁三分四厘七毛五忽未納ニ御

座候処、願之上、差向金千両上納、残金之義は拝借地々代之内を以上納可致旨被仰渡、冥加至極難有仕合奉存候、則金千両今日上納仕候、残金之儀は、壱ヶ年金六拾両上納之割合ヲ以、当巳五月分ゟ金五両ツヽ上納仕度奉存候間、何卒出格之以御憐愍願之通御聞済被成下置候様、偏奉願上候、以上

明治二巳年六月二日　　本革屋町　　家持　俊之助印

東京府宛

『二十七』

『己巳五月十二日廻シ済』

本所一ツ目鞘番所ニ有之候両国橋水防鯨船之儀、今般本所方御廃止ニ付而は、同所ニ差置候書類ハ掛々え受取申候、依之右場所は御不要ニ相成候間、鯨船は深川安宅御船蔵え引移、且是迄番所普請修復入用并番人給分等、竹木炭薪川辺一番組古問屋ニ而為冥加取賄来候間、右番所より番人共右問屋え引渡、鯨船鞘之儀は入札御払之積取計、右地所之儀は受負地ニ取調相伺候様可仕哉、此段相伺申候

巳五月

『二十八』

一、深川万年橋向元海軍所附同心大縄組屋敷

一、永代橋際北新堀元同断組屋敷

一、深川新田嶋元同断組屋敷

右何れも取調候処、町地続ニ付、開市町屋ニ相成候而差支無之、当時住居致し候もの元駿州藩帰田暇願済之者多、旁以町屋に相成候得は寛大之御処置と奉存候、且組屋鋪之内、従来住居ニ而朝臣ニ相成候もの、并他より家作譲

受地所拝借済之朝臣之者共、開市ニ相成候上は、地所御取上ケ外屋鋪地為相願、若右之もの立退方不都合、当分之内住居致し度願之ものは、其次第に寄御差免、地位並之地税当分之内たり共為差出候方可然哉ニ存候

一、深川元船蔵前通船蔵番宮間作太郎外四人上地之ヶ所取調候処、右は町地入会之地所ニ付、開市町家ニ相成候方可然存候、右之儀取調、絵図面之内、△印之分其儘差置町屋ニ相成候而は、軒並不都合ニも存候間、前五人上地同様町地可然存候、右之内、朝臣田中廣三郎儀は拝借願済ニ候得共、角地面殊ニ坪数多、旁以御取上ケ外屋鋪地拝借替為願、軒並町屋ニ相成候方可然と存候

右取調絵図面相添、此段申上候

旧幕元船手川船同心共、当無禄無給ニ相成、差当活計之道無之、困窮及切迫候趣ヲ以、是迄住居候組屋敷今般町地面ニ相願、右所ニ而生活之道相立度旨願出も有、旁以町地面ニいたし候方可然

北嶋　御小印　　杉浦　御小印

右御書取之通伺相済候ニ付、先々取調、朝臣之者えは、御用地ニ相成候間、拝借地返上致し候外、屋敷地可相願旨、銘々触頭え可申達候、則絵図面相添書類御廻シ申候、可然御取扱有之度、御掛合ニ及ひ候

巳四月　　屋鋪改調役

常務方御中

下札ケ

御書面之趣致承知候、夫々取調相伺可申候、此段及御挨拶候

巳五月　　常務方

（『　』は朱字）

町地
『△』荒井金次郎上地受地
町地
大日横町
『△』玉安鎌太郎上地受地
聖天社
『○』高橋幾次郎上地　此坪八拾坪余
『△』金子豊三郎上地
町地
『△』林次郎吉上地
受　渡辺六三郎受領地
町地
『○』宮間作太郎上地　此坪九拾坪
『○』鹿野有一郎上地　此坪百拾九坪余
町地
長谷瑞一郎上地　三百七拾坪余
『辰十月　行政官附　四月廿五日
拝借済　町野隼人触下　外場所相願候様
田中廣三郎　可申付事』
『○』秋葉和助上地　此坪　百拾坪弐夕八才余
『○』原田身之吉上地　此坪百三拾五坪余

本所ヲ目通

跡　蔵　船　元

『行政官附酒井主馬触下
拝借願中　増田　鎌吉
外場所相願候様申渡候事』

右元船蔵前通絵図面之内　朝臣之者左之通

行政官附

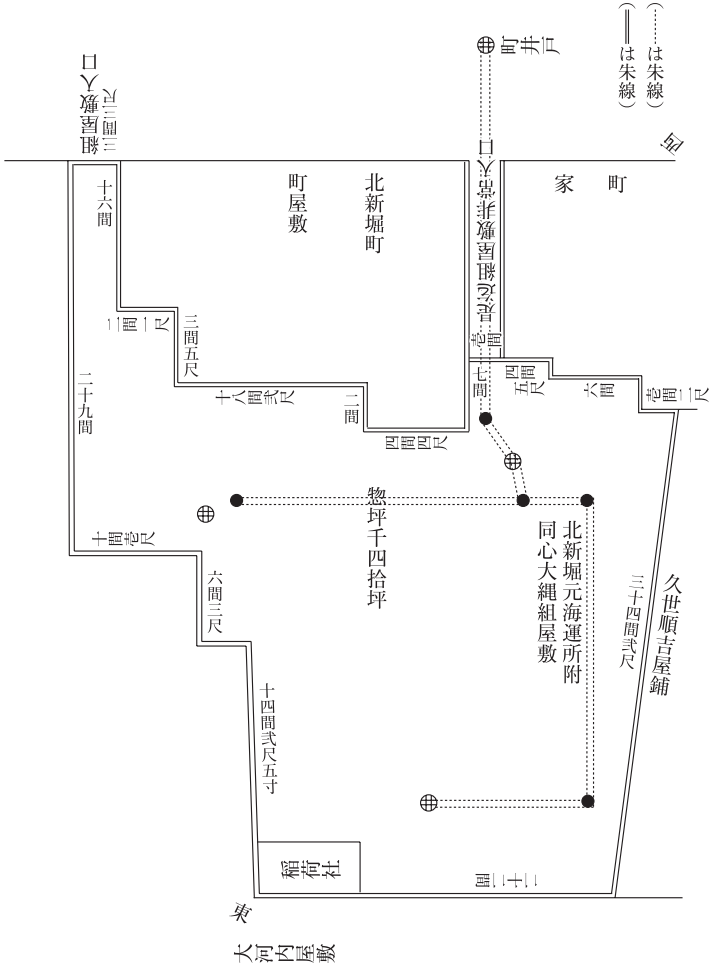
元船蔵番ニ而従来住居之もの　渡　辺　六　三　郎

同　六郷主馬触下

林次郎吉上地ニ住居候もの　増　田　鎌　吉

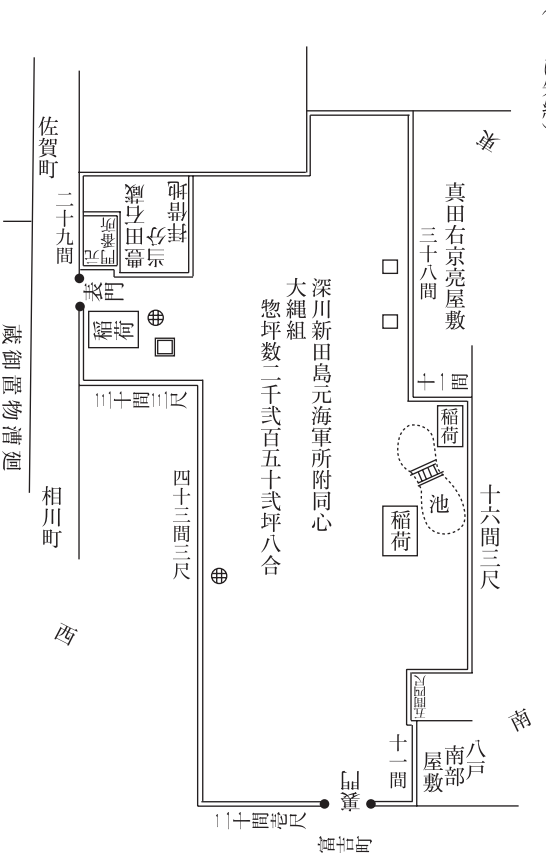
同　町野隼人触下

長谷瑞一郎上地拝借済住居
但辰十月拝借済　田　中　広　三　郎



右組屋鋪之内ニは朝臣之もの無之

右組屋敷之内二は朝臣之もの無之



右組屋敷之内　朝臣之もの左之通

行政官附

中嶋斧右衛門
小川嶋右衛門
林　宅右衛門
高田音三郎
松本左馬太郎

会計官出納司附属

豊田石蔵

巳四月二日拝借済
此坪百拾六坪

但清岡美之吉上地
清岡正吉内弐百拾六坪

行政官附

山岡多喜三郎触下

松本左馬次（ママ）郎
高田音三郎
小川嶋右衛門
中嶋斧右衛門

同

町野隼人触下

林　宅右衛門

会計官出納司附属

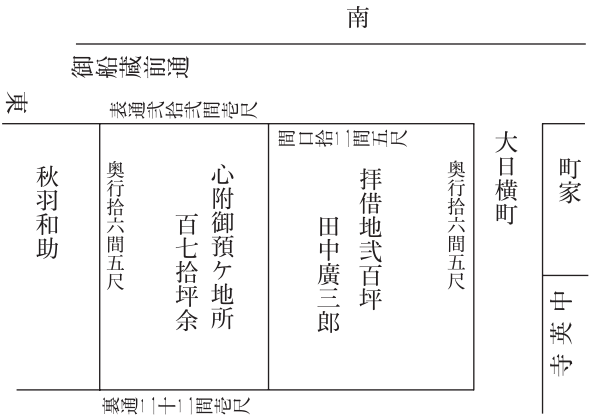
御蔵掛　豊田石蔵
行政官附　町野隼人触下　田中廣三郎
同　酒井主馬触下　増田鎌吉
同　渡辺六三郎

行政官附　町野隼人触下　田中廣三郎　私儀

高三拾俵弐人扶持

是迄拝借住居罷在候深川船蔵前徳川三位中将家来長屋(谷)瑞一郎上地三百七拾坪余之内、弐百坪拝借願之通御許容、残地百七拾坪余は可心附旨、去辰年十二月中被仰付罷在候、然ル所、右地所今般町地ニ相成候様、去月廿八日武川与五郎御取調御座候処、左様相成候得は、家作等取崩転宅可仕、難及自力難渋仕候間、一旦御許容相成候弐百坪ハ、御隣(ママ)慇ヲ以御除、是迄之通当分拝借被仰付被下置候様仕度、猶又別紙絵図面相添、此段奉願候、以上

明治二巳年五月七日



田中廣三郎印

（番号脱）

市ヶ谷田町四町目
五人組持地借　政次郎

其方儀、同町立跡火除明地え新規町家取建、壱ヶ年金七拾両上納之積ニ而受負致し度段願出ルニ付、相糺候処、不相当之儀も不相聞間、右金高を以願之通受負申付ル、尤不取締之儀等無之様可心付
　但、上納金其外委細之儀は、常務方差図可致

右町役人

右之通申渡間、其旨可存

巳五月六日

『二十九』

去ル七日及御問合置候其御府支配所郷村を除之外戸数之儀、至急入用ニ候間、早々御申越有之度、猶又此段及御掛合候也

五月十五日

会計官

東京府御中

下ケ札

御書面之趣承知いたし、別紙戸数書差進、此段及御挨拶候也

五月

東京府

東京朱引内市中戸数
拾弐万六百六軒

『三十』

東　京　府

旧年中御府内外境界御取極相成候ニ付、府内助成地其外租税御収納可相成ヶ所々、会計官え打合、租税高等取極、御収納筋等早々可被取計候、且府外之分ハ、夫々取調知県事え引渡候様、申達候事

四月　　民　部　省

『三十一』

『己巳五月十四日廻済』

旧幕府元町奉行内与力と唱候用人受領地、元組屋敷ニ四人分有之、借地住居人地代之義、是迄組用之引続を以常務方ニ而取立候処、当今組屋敷之名義無之進退仕候而は不都合ニ有之、武家上地之借地之代は屋敷改ニ而取立候義ニ付、右地所屋敷改え引渡可申候間、地代取立方等同掛え被仰渡候様仕度、此段相伺申候

巳五月

（『三十二』脱）

『己巳五月廿八日町触』

一、内神田・浜町・築地辺、郭内ニ準し候旨、去辰九月中相触置候処、此度神田橋御門通ゟ昌平橋通ヲ境と致シ、東ノ方神田・浜町・築地辺、以後郭外と可相心得事

一、是迄武士地え住居致し居候町人別之者又町医師、町人別之部ニ入、其処年寄共右地所拝借証文え加印致し差出候ハヽ、当分差置、地税為差出可申事

右之通町中不洩様可触知もの也

五月

『三十三』
『己巳五月』
武士地町地共地税取調出来之上出納方ニ而取立可申事
此度郭内外武士地之儀、御規則相立、地税之儀も夫々可差出旨、就而は右取調取立方とも、屋鋪改ニ而相心得可申哉、尤町地ニ相成候分は、常務方ニ而相心得候方と奉存候、此段相伺申候
巳五月
『三十四』
『己巳六月』
是迄諸官々員附属ニ至迄、邸宅拝借被仰付置候処、先般御規則被相立御布告有之候得共、今以六等官以下猥ニ邸宅拝借願出候間、以後屹度御布告之旨相守、六等官より以下其官々長屋え住居可為致候事
但是迄拝借罷在候六等官以下之輩ハ、早々其官々長屋え向ケ為引取可申、若長屋無之場所は、合宅拝借可被仰付候間、其官々ゟ可申出事、三等官以上は、過日御布告有之候通り、坪数を以邸宅拝借可被仰付事
四等官五等官同断
一、職務被免邸宅拝借いたし居候輩は、来ル廿日営繕司ゟ為受取罷出候間、其節速ニ引渡可申事
六月　　行政官
『三十五』
『己巳六月』
東京中諸邸上地之分、追々拝領拝借等相済、朱引外は開墾場、朱引内は開市等に見立、夫々取調罷在候得共、数千ヶ所之上地にて、当今草生茂り、其上乞食体之もの所々え露宿いたし、行倒死人等も有之、右を差構候もの無之、場

所ニ寄候而は荒野同様之姿ニ相成、第一御体裁ニ相拘候間、万石以上以下朝臣之面々受領邸地続又は明地等拝借相願候ハヽ、相当之地代上納申付拝借申渡候ハヽ、御益筋も相立、殊一般取締も行届可申と存候間、可然儀ニ御評決相成候ハヽ、至急御布告有之度、依之別紙御触案相添申入候也

六月　　東京府判事

弁事御中

御布告案

万石以上以下、邸宅手狭ニ而差支候ものハ、隣地拝借又は添地相願候ハヽ、東京府おゐて取調之上可及沙汰候間、右相願度面々ハ同所え可申立事

但地代相当之上納可致事

一、武家上地内或は地先え行倒死人又は異変之儀有之節は、最寄辻番所ニ而相心得、且辻番所無之場所は近隣住居之武士町人ニ不限、見付次第無遅延東京府え可届申事

一、武家上地之内、長屋其外ニ而商人家同様ニ相成居候場所も有之、不取締之義ニ付、今後開市願済場所之外ハ、右様之儀不相成候事

右之趣更ニ相達候也

六月

『三十六』

『己巳六月』

朝臣之面々従前受領屋敷之儀、改而拝領願出候分ハ下賜候方ニ取調、従前之受領屋敷大破等ニ而外場所見立願出分

ハ、先拝借之方ニ取調、夫々御下知相成居候得共、以来差支無之相当之願は、是迄之受領地有之候ハ、上地為致、願立候場所下賜候積取調可申哉、左候ハ、御規則之通万石以下分限ニ応拝領屋敷壱ヶ所ニ差定候義、発輝と相成可申、且地代上納之上拝借相願候分は、別廉ニ取調夫々相伺候様可仕候哉

六月

拝借地規則

万石以上以下共、御定之外拝借屋敷は、相当之地代上納申付候積

但場所柄ニ寄地位甲乙も有之候間、坪当何程と一般ニ差定置候儀相成兼、乍併大凡百坪ニ付壱ヶ年地代永壱貫文を上等ニ致し、地位劣り居候分ハ、其節ニ調之上減方相伺上納申付積

一、町屋鋪受領之ものニ而武士地拝借は、最寄並合之地代上納之積

一、宮堂上方家来・藩士・御用達町人・町医師・相撲・検校・勾当其外是迄住居いたし候町人別之者、武士地拝借相済候分ハ、同様最寄並之地代上納申付候積

一、新規町地ニ相成候場所朝臣ニ而先前より借地住居之者、転居可致筈之処、勝手を以住居いたし候得共、最寄並合之地代は勿論、町入用可差出様申候積

『己巳六月廿七日廻シ済』

武家地拝借御聞届規則之義ニ付、今般相伺候箇条之内、百坪ニ付一ヶ年地代永壱貫文を上等ニ致し、地位劣り候場所は夫々減し方取調可申積、御治定相成候共、猶再考仕候処、神田お玉ヶ池最寄、浜町辺抔ハ、是迄百坪ニ付拾両以上之地代地主え受納いたし候趣ニ而、格外不釣合之義ニ有之、乍併今般之御規則は、官より直ニ拝借地致し、地

代上納之筈ニ付、下ニおゐて相対之義とハ訳違ひ、右体過当之地代取立候筋は無之候得共、自然町屋敷受負上納地等ニ見平均不宜候間、地位宜敷場所は今一廉上納相増候而可然義ニ付、百坪ニ付永三貫文を上等ニ致し、夫々取調申上候様可仕候哉、且右拝借住居相願候相撲・検校・町医師之類は、町々中年寄添簡ニ而拝借願出、身分町人別之者ニ付、此者共は右上納高之一割五分元人別町え為余荷差出候様可申渡候哉、此段相伺申候

巳六月

『三十七』

『六月廿日廻シ済』

上地相成候町屋敷其外明地新開町屋買下ケ並受負又は拝借之儀、武家寺院等願出候類間々有之、既会計官ゟ御引渡相成候地所之内、寺院え拝借被仰付候分も有之候得共、地代納方其外差支之筋も有之候間、以来ハ他支配之もの沽券代差置候振合を以、受負代並沽券代之者名前為書出、武家寺院其外御支配違之者ニ而も、相当之分ハ被仰付候方ニ取調相伺可申哉と奉存候、此段相伺申候

六月

一、六等官　凡三百坪位より四百坪位迄
一、七等官　凡弐百坪位より三百坪位迄
一、八等官　凡百五拾坪位ゟ弐百坪位迄
一、九等官　凡百坪位より百五拾坪位迄

右之外、五等官以上えは、四百坪以上之屋敷割渡申候事

但其場所又は残地之次第地形ノ都合ニ而坪数過不足有之、且不勤之もの共、世禄ニ応し取調候事

拝借地規則

一、万石以上以下とも、御定之外拝借屋鋪は、相当之地代上納申付候積
　但場所柄ニ寄地位甲乙も有之候間、坪当何程と一般ニ差定置候儀は相成兼、乍併大凡百坪ニ付壱ヶ年地代永壱貫文を上等ニいたし、地位劣り居候分は、その節ニ調之上減方相伺上納申付候積

一、町屋鋪受領之ものニ而武士地拝借は、最寄並合之地代上納之積

一、宮堂上方家来・藩士・御用達町人・町医師・角力・検校・勾当其外是迄住居いたし居候町人別之者、武士地拝借相済候分は、同様最寄並之地代上納申付候積

一、新規町地ニ相成場所、朝臣にて先前ゟ借地住居之もの転居可致筈之処、勝手を以住居いたし候得は、最寄並合之地代は勿論、町入用も可差出様申付候積

六月廿九日

下ケ札

神田濱町辺は、地代百坪ニ付永三貫文上等といたし、其余は右ニ准シ取調可申候哉
　但外ヶ条は最寄並之地代可差出旨取極之通其儘被差置候積

（続く）

（よこやま　ゆりこ　本学教授）